［地域総研紀要　19巻１号, Ｐ１－18（2021）（一般論文）］

高田保馬の家郷肥前三日月―草花の匂う社会学の誕生*

吉野　浩司**

The Sociology Scented with Flowers and Grass: Hizen Mikazuki-mura for Takata Yasuma

Koji YOSHINO**

はじめに

郷土が生んだ偉人という言葉には、その土地で生まれたり、住んでいたりした著名人を、ふるさとの誇りにしたいという地元の人たちの思いが込められている。生家や旧宅などを保存することもあれば、そこに、ゆかりの品を展示したりすることもある。とはいえ多くの場合は、せいぜい青年期ぐらいまでを過ごしたか、生涯のある一時期に寓居した、という程度であることが多い。特に立身出世のための社会移動の激しくなった、近代以降の人物となると、なおさらその傾向は強い。より高い教育や文化を受け取るためには、地方の寒村で蟄居しているわけにはいかないからである。長い経歴の主たる部分を、地元に根差して、暮らしを営んだという事例は、ほんとうは稀なのではないだろうか。

その稀有な例として、大正から昭和にかけて活躍した、日本を代表する社会学者・経済学者高田保馬（1883〔明治16〕年-1972〔昭和47〕年）をここで取り上げてみたい。彼の場合、郷里の佐賀県小城市三日月町とは、切っても切れない関係にあるからである。彼の独創的な思想も学説も、このふるさとの気風がもたらしたものである、と言っても過言ではないのではないか。その意味で高田の学問は、そこはかとなく草花の匂いのする社会学と呼称してもいいような成り立ちをしている。高田にとっての三日月町は、遠く離れてしまった、心の中のふるさとなどではない。社会理想の着想を得るきっかけとなった通学路で目にする天山を仰ぎ見る場所であったし、発表された著作を多く手掛けた自宅の書斎のあったところであった。またこよなく愛し、心を砕いた地元の人たちの生きる農村であった。そして先祖代々の墓所のある土地である（写真、2020年11月筆者撮影）。そうした郷土愛あふれる高田の気持ちに応えるかのように、現在に至るまで、彼の名は地元の人々の間で親しまれている。

一例をあげよう。1994（平成６）年12月、小城市の有志が中心となり、高田保馬博士顕彰会〔以下、高田顕彰会ないし顕彰会と略記〕という組織が発足した。著名な文学者や政治家の顕彰会であれば、全国的にも、そう珍しくはないだろう。そうではなく、一介の学者に対しての顕彰会ができたこと、さらにその会が25年以上も継続していることは、実に驚くべきことではないだろうか。その秘密を探ってみたいというのが、本稿執筆の動機である。つまるところ、高田にとって家郷とは何であったのか。そのことを高田の学問と思想の側から、そして地元の人々の顕彰活動の側から考えてみるのが、本稿の目的である。

第１章　自伝にあらわれた三日月の村

高田は、たいへんな健筆家であった。専門である社会学や経済学は言うに及ばず、趣味である和歌についても、実作もすれば、一家言を持ってもいた。くわえて後学の徒にとってありがたいことに、実に多くの自伝的記述を残してくれてさえいる。主だったものだけでも、『回想記』(1938)[1]、『思郷記』(1941)、『洛北雑記』(1947a）などの自伝的随筆の数々が思い浮かぶ。書籍にはまとめられなかったが、週刊誌『エコノミスト』に連載された「私の追憶」(1957-1958) や、同工異曲だが、これに先立って一部、より踏み込んだ記述もある雑誌『経済』に掲載された「学問の旅－一学究の自叙伝」(1949）などは、京都帝国大学に赴任するにいたるまでの、最も詳しく書かれた自伝であ

* Received December 25, 2020
** 長崎ウエスレヤン大学　現代社会学部　経済政策学科、Faculty of Contemporary Social Studies, Nagasaki Wesleyan University, 1212-1 Nishieida, Isahaya, Nagasaki 854-0082, Japan

るといってもよい。これらに公職追放以降の『学問遍路』(1957) を付け加えると、高田の研究経歴は、ほぼ全てたどり直すことができるだろう。これらの著作を読み解くことは、そのまま日本の黎明期の社会学や経済学の歴史の秘話をひもといていくことに等しい。

しかも彼がたしなんだ和歌とても、同じことが言えることを付言しておきたい。高田が詠んだ歌の数々は『ふるさと』(1931)、『洛北集』(1943)、『望郷吟』(1961)、に収められており、その時々の彼の行動や心境を、かいま見ることができる。下村湖人 (1884-1955)、明星派、アララギ派、あるいは中島哀郎 (1883-1966)、窪田空穂 (1877-1967) に近づき、教えを乞うことで高田は、自らの作歌能力をみがいていった。ここで注目しておきたいのは、自選自註という形で、自作の歌の歴史的背景を解説した『社会歌雑記』(1947b) である。

本稿で取り上げたいのは、これら高田の伝記的著作にあらわれた家郷への論及部分である。高田が家郷について語るその内容は、彼の社会学説・経済学説の根幹にある＜社会観＞とも、密接に絡み合っている。これらは、いきおい抽象的理論に傾きがちな、高田の独創的学説を理解する上で、多くの手掛かりを与えてくれる。家族や親族たちとのふれあい、わけても母との思い出。生まれ育ったふるさと佐賀県小城郡三日月村 (現小城市三日月町) の山河。通いなれた旧制小学校、中学校の通学路などなど。高田がこれらを実に細やかな筆づかいで、愛情豊かに描き出しているのは、とても印象的である。

ただし最初に断っておきたいことがある。それは学説理解のよすがにするとはいえ、ここでは何も、高田が熱く論じた農村人口の窮乏や、米作を芋作に変えようとする農業政策、ましてやアジアの遅れた民族の進むべき道、といった彼にとっての切実な話題に安直に結び付けよう、というわけではない。日本の農村と農民を愛し、賛美することは、容易に民族中心主義、ナショナリズムに結びつきやすいのは事実である。その嫌疑のため、高田は戦前から戦後を通じて、絶えずきびしい批判にさらされてきた (河村、1992、北島、2002)。それは最終的に公職追放という形で顕在化した。このとき彼は、京都から三日月に下野し、約５年という決して短くない期間、雌伏の時を過ごさなければならなかった。しかし、ここでいえることは、高田のその時々の情勢論、時論は、時代におもねる扇動的な随想などではない、ということである。いかに激しい論調の主張であったとしても、それは彼の学問的な知見に裏打ちされたものであった。そのことを示すために、以下では、高田社会学の根底にある、「群居の欲望」という彼独自の立場に焦点を絞りたいと考えている。高田の社会学説を理解するには不可欠であるこの「群居の欲望」という考え方が、いったいどのような背景から生まれ出てきたのであろうか。まずはそこから話を始めてみたい。

第２章　郷里で過ごした期間

三日月町といえば、高田が旧制高校に進む18歳までの歳月を過ごし、また人生の節目節目で帰省した場所でもある。それはただの帰省の時もあれば、病の療養、さらには公職追放の憂き目を見た時期もあった。九州帝国大学に職を得たさいには、ここを終の棲家とすべく、家屋を新造したりもした。在職期間には、遠距離通勤の労を厭わず、自宅から通った。

このように三日月町は、文字通り高田の心と体を癒し養うのに、不可欠の場所であった。あえて極端な例として、高田が公職追放に見舞われ、故郷に下野したさいの、素直な思いに、耳を傾けてみたい。

> 私〔高田〕の気分からいふと、身体は幾十年の放浪をつづけたが、漸く父祖の、また夭折した子どもらの墳墓の地にかへつてきた。それに、魂もまた初一念である社会学の分野から経済学の分野にさまよひあるいて三十年の春秋を過ごしたが、も一度学問のふるさとに帰りたいと思つた。(1957, 48)

故郷に帰ることと、学問の初心に立ち返ることとが、並行して語られていることが興味深い。高田といえば、京都帝国大学 (1929年～1944年在職) で長らく教え、退官後、大阪大学 (1951年～1955年在職)、大阪府立大学 (1955年～1963年在職)、龍谷大学 (1963年～1965年在職) と移ったさいも、ひきつづき京都塔之段の居を移らなかったことから、京都を連想する人が多いかもしれな

[1] 以下、高田保馬の文献については発表年のみを記す。

い。しかし意外なことに彼は、人生の半分を過ごした京都については、むしろ、あまり好ましく思っていなかったようである。学生時代の終わりに、容易に母校の社会学の職に就けなかったのもその一因であろう。きっかけらしきものは、大学院に進んだころを回想する彼の文章の中に盛られている。

> 試験も済み、引きつづき大学院生となったが、特選給費生の中にはいらない。私〔高田〕はまず期待をかけている兄にすまぬと思った。次に佐賀中学という母校にすまぬと思った。〔・・・〕天下の秀才が殺到しているというのでもない大学に来てどうしたことかと思った。自分の能力や努力を卑下してはいなかった。この頃から私は京都と京都大学とに愛着をあまり感じなくなった。(「私の追憶　京大入学（二）」)[2]

郷里の母校と兄に対する申し訳ないという気持ちが何より先にこみあげてきているところに、高田のふるさとへの思いが表れている。ここで思い当たるのは、「結合定量の法則」という高田の主要概念である。結合したいという欲望（愛着）の総量は一定だとする考え方である。それによると、Ａへの愛着が強まるにしたがい、Ａ以外のものへの愛着が弱まっていくことになる。高田の場合でいうと、三日月町へのつきせぬ郷土愛が、結果として、他の地域への愛着を弱めている、ということにでもなろうか。京都帝国大学への赴任が決まった時でも、かつて味わった哀しみは癒えていないようである。

> 洛北のどこを歩いてもかつては憂の涙を落したところ、ため息のはきすてどころならぬはない。太陽は京都にのみ照らずといい去った一人の放浪の学究は運命のあやつるがままに旧都にもどったのである。(「私の追憶　九大から京大へ（二）」)

ほんの一時期過ごしたことのある広島や東京についていうと、持病の胃痛をこじらせ、帰省を余儀なくされた苦い記憶となってわだかまっている。病を癒し、神経の疲れをほぐしてくれるのは、やはり郷里をおいてほかになかったのだろう。その三日月町で、高田はどれだけの年月を過ごしたのかを示したのが、表１である。実は88年の生涯のうち、少なく見積もっても、三十有余年を郷里で過ごしていることが、伝記の記述からうかがえる。そのことについて、これまで顧みられることがなかったのは、むしろ不思議なぐらいである。

表１．高田保馬が郷里三日月で過ごした期間

年	年譜	年齢	期間
1883(明治16)年～1901(明治34)年	生まれてから旧制中学の卒業まで	18歳まで	約18年
1903(明治36)年	熊本五高時代の療養期	22歳	約半年
1925(大正14)年～1928(昭和３)年	九州帝国大学の教員時代	45歳まで	約４年半
1929(昭和４)年～ 1933(昭和８)年～	京都帝国大学時代の毎年の帰省 (九州帝国大学兼任の期間)	50歳まで	約２年
1947(昭和22)年～1950(昭和25)年	教職追放の時期	67歳まで	約５年半

さらにいうと、上の表には加えていないが、米田庄太郎に社会学を指南した京都帝国大学の学部時代にも、長期休暇の折、年に２、３度は、必ず帰郷していた。目的は、母に会うことと、家の畑仕事である。

[2] 高田の自伝「私の追憶」の引用に際しては、煩を避け章題のみを記す（高田、1957-1958)。なお〔　〕は筆者による補足。

第３章　農村で発見した「群居の欲望」

郷里と彼の学説の関係を考える上で、最晩年に書かれた彼の論文の中にふとさしはさまれた、見逃すことのできない、京都帝国大学の在学当時をふりかえった回想がある。

> 冬休みに帰郷した折には、ひまあるごとに麦田に餌をあさるからすの大群を見ては群居本能に思いをめぐらしてゐたことを思ひ出す。当時から「人間結合は利益の故にはじまらず、結合自体を求めてはじまり（内的結合）、その上に利益のための結合が加わる」と考へ、内的結合と外的結合とを対立させた。（高田、1964、１頁）

高田といえば、社会の成り立ちを、人間のもつ「群居の欲望」と「力の欲望」という、２つの欲望をもって説き起こしていることで知られている。そのうち、社会学と経済学の集大成として完成させた『勢力論』(1940）という主著は、もっぱら「力の欲望」の方に力点を置いて書かれている。これは最初期の関心であった分業論や階級論を発展させたものであるといえよう。そのようなことから、これまでの先行研究では、「力の欲望」の方への論及が多い。それにひきかえ、純粋な「結合のための結合」をもたらしてくれる「群居の欲望」の方は、これまでの研究を見ていても、やや関心が薄いように思われる[3]。『社会学原理』(1919）や『社会学概論』(1971）の最初の方で、簡単に取り扱われている、社会が成立するための出発点としての意義しかないかのようである。はたしてそれは、正しい高田社会学の解釈だといえるのだろうか。

筆者の理解では、「群居の欲望」こそが、高田の社会観を根底から支えている土台である。これなくしては、彼の社会学は正しく理解し得ないのではないだろうか。さらにいうなら、「群居の欲望」を抜きにすれば、「力の欲望」を発揮する土台は掘り崩されてしまうとさえいえるだろう。そのことを確かめるには、「結合の上位」という、これも見過ごされがちな論文に着目してみる必要がある（1926)。社会関係には結合（融和）もあれば分離（対立）もある。しかし根本において「群居の欲望」による結合が土台になければ、社会は存立できないということを明言した最初の論考である。分離（対立）のさなかにあっても、結合の契機が見出せると高田はいう。そのことから、高田は「結合の上位」説を唱えるようになった。

一般に社会学の対象である社会は、つまるところ人と人の結合であると考えられている。その結合とは、どのようにして成立しているのか。また、どのように変化していくのか。その考え方が、社会学者の学説を大きく規定することになる。そこで、高田にとって社会とは、どのようなものであったのかについて、まずは学説の面からとらえてみたい。

社会は人々の結合によってできている、高田はそう規定しながら、その結合の仕方を２種類に分けている。１つは、利益や利害など、ある目的を持った結合（外的結合）で、これが利益社会をもたらす。いわゆるゲゼルシャフト、すなわち近代社会、企業組織、政治団体、契約関係といったものが、利益社会に属する。もう１つは、目的のない、いわば結合のための結合である。こちらの方は、共同社会を形成する。ゲマインシャフト、すなわち前近代社会、村落共同体などがそれである。そして後者の共同社会を生むために必要な、結合のための結合の根拠となるものを、高田は「群居の欲望」に求めたのである。

人間を含む動物は、群れを成して生きている。それは１つには獲物を取ったり、外敵から身を守ったりという共通の目的、利益のためであろう。しかし、結合はそれだけであろうか。集まって住むということは、一見、非合理的で無目的な側面も確かに存在している。群れているがために、かえって目立ってしまい、外敵に狙われてしまうこともあろう。そうした事態を説明するには、目的や利害や利益といったものとは別に、どうしても「群居の欲望」というものを想定しなければならなくなってくる。これが基礎にあるからこそ、自己を犠牲にしてでも子を育て、集団としての生き延びを考えるというような行為がなされるのである。自分の家族や郷里、生まれ落ちた国や民族を愛するのは、他でもなく、この結合のための結合によるものである。村落共同体に咲き誇

[3] 高田の「結合」概念の重要性を指摘した上で、その欠点を指摘した社会学者としては臼井二尚がいる（臼井、1973-1974)。

る草花の匂いが漂ってくるような社会学ではないだろうか。「民族」への思いが募ったのも、やはり郷里においてであった。

> 大正八〔1919〕年のはじめ、冬休みの終りであったろう。私は郷里にかへってゐた。親戚の家を自宅から五里ほど離れた小さい町神崎にたづねた。終りの下りにのつて家にかへろうと思ひ十町ばかりの川添ひの道を停車場へと急いだ。正月ではあるが寒い夜のことではあるし、田舎道の人通りも殆どない。左手には下の方で微かな川の音が聞える。歩いてゆく中にふと西の空をみ上げた。黒ずむまでに深い蒼い空の色である。その奥から上弦の寒月が冷たい光をなげかけてゐた。この光が私にふと民族と云ふことを思はせた。(1934、17頁)

だが、ここで重要なことは、血のつながりや地縁といったものが、この結合のための結合を基礎づけているわけではない、という高田の留保である。地縁や血縁ではなく、それらがもたらす共同意識が、結合を生むというのである。「血縁の事実即ち血の続き合いと云う生理的事実は人人を愛着せしむる神秘力を有するものではない、この種の血縁の親和と云うものは血縁の意識から生ずる親和の念でなければならぬ」(1971、51頁)。このような高田の議論は、自民族中心主義(エスノセントリズム)や、ナショナリズムとは、一線を画していることに注意しておく必要がある。「親和の念」という、いわば「想像の共同体(Imagined Communities)」が、社会の根幹を形作っているのである(アンダーソン、1997)。地縁や血縁が結合の基礎のように思われる理由は、土地や血のつながりの強い人々は、自分と相似た間柄であり、付き合いも長きにわたるためである。この考え方があるために、高田の民族論は狭く閉ざされることなく、人類の共同体への道にまで開かれているのである(吉野、2004)。

第４章　父母兄弟の住むふるさと

ふたたびここで、自伝に立ち返ろう。高田が少年であったころの三日月町は、20戸程度の小さな集落であった。近くに小さな社と上下の権現があり、祭礼と神事が執り行われていた。晩成小学校(現三日月小学校)での８年間は、自宅から学校までの片道４キロを歩いて通った。旧制佐賀中学校(現佐賀西高校)での５年間は、片道８キロの道のりを、やはり徒歩で通学しとおす。道すがら見えてくる嘉瀬川ではハヤを採ったり、泳いだりもした。いつも天山を遠望していた。長じてからさえ、帰省の折にこの風景を見るに及んでは、ようやくふるさとについたという安堵の心持ちになった。母を亡くしてからは、母に再会しえたような気分を味わうようになった(1941, 22-25頁)。

> 私〔高田〕は中学時代に郷里から佐賀の中学まで、約二里半の道を徒歩で通学してゐた。同村の友だち(今の朝鮮信託の谷社長[4])が三年生までは通学しても四年、五年になると皆下宿したが、それでも私は通学をつゞけた。学資がないわけではなかつたが、村を離れたくもない、一人の母を家に残したくもない、と云ふ氣持がさうさせたと思つてゐる。二里半の道はことに夏の日に長かつた。かへりには、途中の川岸の松林に休み、またその川に泳ぐ事も多かつた。今から考へると、川岸の町から佐賀に通学されたと云ふ吉田絃二郎[5]あたりとも一しよに泳いでゐたのかも知れない。(1934, 8-9頁)

このようにして学校に通っていた1902(明治35)年２月末のある日こと、旧制中学卒業まぢかの高田の胸に、社会に目を向けさせるような、ひとつの想念がめばえた。長時間、もくもくと歩くという行為は、時として人に理想や空想をもたらしてくれる。思考の整理を促してもくれる。しばし歩みを止め、天山の夕陽を見上げた高田に浮かんだのは、不平等や不正が生まれてくる社会を、どうすればもっと良いものに変えていけるのか、という問題であった。

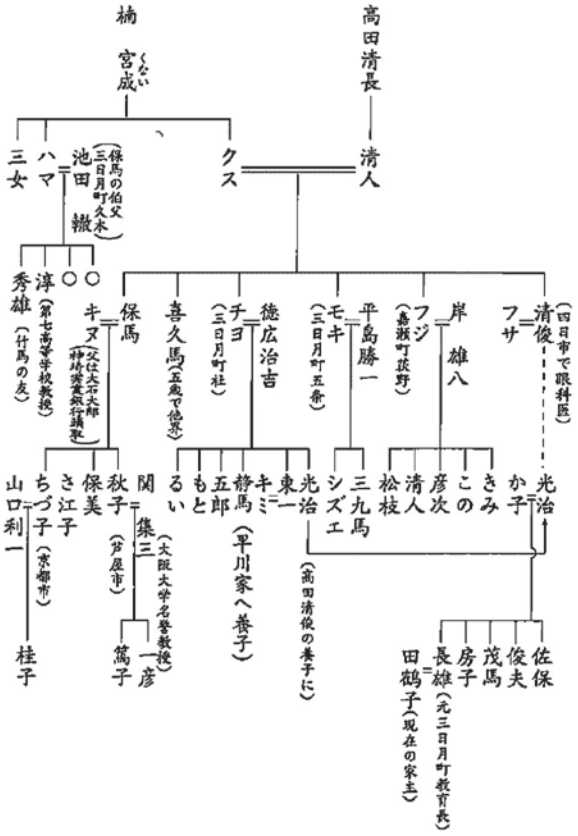
> 貧富の懸隔を何とかしなければならぬと思ひこんだ。此氣持にみたされて、その日の夕陽をながめたのである。私〔高田〕はこれからどんな方針をとつて進むにしても、悔ゆることなく死なう、

[4] 谷多喜磨(1884年-1952年)。朝鮮総督府の官僚を務め、のちに朝鮮半島のいくつかの企業の社長に就任した。

[5] 吉田絃二郎(1886年-1956年)。早稲田大学文学部英文科教授で、退職後、多くの文学作品を残す。

悔ゆることなく死ぬ道は弱いものの爲にすることである、と思つた。此夕日の印象は強く私に社会への興味を植ゑつけた。（1934、９頁）

このふるさとで、高田家はどのような暮らしをしていたのかを次に述べておきたい（家系図、高田保馬博士顕彰会、2004、36頁）。高田は、父清人の50歳の時の子である。４人兄弟の末子であった。25歳年上の兄、その下に３人の姉妹があった。代々、天台宗の修験を行う家系に生まれた父は、35歳の時に明治維新にあっている。廃仏毀釈で神官となり、その傍らで作男２名を雇って農業を営んでいた。父方の祖父清長は豪放磊落、酒豪でもあった。「乞食を見ると何でも輿へる気になり、いつかふんどしまではづしてやつてしまつた」という逸話が残っている。そのような性格であったから高田家の財産はたちまち底をついてしまった。祖父の墓石には、ひょうたんと杯が彫られている。それを見て育った父は、生活の切り詰めを心がけるも、生活はいっこうに好転せず、兄の学費を工面するにも、借金をしなければならなかった（1941, 14-15頁）。



父は病を治す祈祷もできた。そこで父は医業を好み、漢方薬処方の心得もあった。また若い頃は和算をよくしたという。「理知的の性格であった」、と高田は父を評する（1941, 12-13頁）。その父は59歳の時に脳溢血を引き起こし、61歳で再発してからは半身不随の不自由な生活を余儀なくされた。そしてついに肺炎のために亡くなるのが1898（明治31）年６月、享年65歳であった。この時高田は、16歳であった。

高田の兄は清俊といい、父の死後は、父親代わりを務めた。母からは、「私〔高田〕など兄の足元にもよれぬ人間」だといつも言い聞かされて育った。「才気煥発でもあり、又裁決流るるが如しとでもいひたい事務の才能ももつてゐた」。1891（明治24）年前後から、四日市市で眼科医を営んでいた。なぜ四日市市に移り住んだのかは不明だが、おそらく結婚問題などのため、郷里に留まることが出来ずに移住したのだろうと高田は推測している。

のちに熊本の第五高等学校の三部に高田は進んだ。三部といえば医科である。むろん兄の勧めであった。その兄は、父が中風にかかったときにも、肺炎になったときにも、とんで帰ってきた。「愈々絶望といふときに奥の間に入つて身体を横たへ、もだへてゐた姿がなほ少年の私〔高田〕のこころにも深く刻みこまれた」。「感情に強い」はずの厳格な兄が、高田の作った父への挽歌に対し、「苦しいからこんな歌は送つてくれるな」といったのも、高田をいたく驚かせた（1941, 20頁）。

父親代わりとなった兄は、旧制中学五年の高田に、『中学世界』や『文庫』といった少年雑誌を送ってよこした。なかでも高田に忘れがたい印象を残したのは、『文庫』に掲載された千葉亀雄（1878-1935）の軽業師についての論文である。それにより彼は、貧困問題に開眼する。天山の夕陽に誓った、あの弱者への思いは、そうした読書体験からきているのかもしれない、と高田は推し測っている（1934, 9 頁）。旧制佐賀中学の論集『栄城』に、３、４年生ごろより高田は囚人の詩、救貧についての論文、その他短歌などを書いている。

父や兄にもまして、人生においていっそう決定的な影響を高田に与えたのは、母クスである。母方の祖父は楠宮成[6]。三人姉妹の長女に生まれた

[6] 高田は「楠宮内」と誤記している。

母は、高田家に嫁いで、上述のように二男三女をもうけた。そして1922（大正11）年82歳で永眠した。

中学五年、往復五里の道を通学しつづけたのも、私〔高田〕一人に全身の慈愛を注いでくれた老母に別れたくないからであった。九月のはじめに幸に入学して熊本に向かうという日には、朝早くまず家を出てから濠に沿うて道を回った。門先に老母と送別の為に泊っていた三人の姉はしきりに身振を示している。その傍には百日紅の老木が咲き盛っているのが見える。僅か四時間で往復できるのに、涙とどまらぬという感傷も血縁の深さの故である。秋風に吹かれて野を行く青年はいくたびかふりかえった。母子四人はいつまでも家に入らぬ。五十幾歳追憶はなおあでやかである。（「私の追憶　京大入学以前（一）」）

大学教員となったある日のこと、高田は武雄市川古の中学校の落成式に、村長高田敏雄の招きで呼ばれる。ここは母のふるさとである。川古の大楠という樹齢3000年にもなる大樹が近くにある（写真、2020年11月筆者撮影）。講演では、「私〔高田〕も半ば若木村の皆さんと血を分け合って居ります、私の母は皆さんの若いときになさったやうに、川古の宿の東のあの川で泳いで居りました」と語りだしたとたんに、涙があふれ出てきたという（1957, 59頁）。高田はこの地の若木中学校に校歌を送った。

この母方の従兄も、高田に多大な影響を与えた。高田より年長の池田秀雄（1880-1954）である。三日月町久本の池田家に嫁した母の妹ハルの息子にあたる。高田に先んじて五高に進み、東京帝国大学を卒業して衆議院議員となった。

最後に、一番下の姉チヨについても述べておこう。年齢が９つ違いであることから、三人の姉の中では最も親しかったという。姉は高田の帰りを、いつも待ちわびていた。その姉を、ついに1946（昭和21）年８月24日に失う。高田のはらからは一人もいなくなった（1957, 23-26頁）。

本来どこかに気を負うて立ちたがる傾向をもつ私〔高田〕が本質的に感傷的であり、ゲマインシャフト的（共同社会的）であるのも、あふれるばかりの母と姉との恩愛にひたりつづけたからであろうと思う。（「私の追憶　京都以前（一）」）

第５章　家郷に生きる高田の思想

高田が自らの学問を練り上げるために多くの時間を費やしたのも、三日月町であった。高田は３か所に書斎を持っていた。京都の塔之段にある住まいの書斎、京都大学の研究室、そして三日月町の自宅である。その中で、「心から書斎といふ感じをもつて坐りこむのは、郷里の家の二階の一室」であった（1941, 27頁）。高田の九州帝国大学への赴任が決まり、研究の拠点とすべく、1925（大正14）年に建て替えられた家である。特に九州帝国大学に在職した1925（大正14）年から1929（昭和４）年までは一年中、その後、京都帝国大学との兼任の期間にあたる1934（昭和９）年ごろまでの一年の半分を、この書斎で過ごした。高田も述懐するように、「この期間こそは私〔高田〕の健康の最も衰へたる期間であつたが、同時にまた精神的には最も学問上の仕合せを享受した期間でもあつた」（1941, 32-33頁）。40代の、まさに脂の乗り切った時期を、この三日月町の書斎で過ごしたといえよう。

この二階の北向きの書斎（写真、2020年11月筆者撮影）で書かれた著作は少なくない。1920年代半ばの高田の研究の興味は、二方面に分かれていた。マルキシズム論争をきっかけにのめりこんだ経済学と、以前より進めていた社会学である。そのうち、宿痾ともいうべき胃病に悩まされながら準備したのが、九州帝国大学での「経済原論」講義である。後に、この講義ノートをもとにできあがったのが『経済原論』（1933）である。それから1928（昭和３）年に出された『景気変動論』（1928）あたりまでが、この書斎で書かれたものであろう。社会学の方でも、『社会学原理』（1919）以来の議論の深まりが感じられる。当時、ドイツの社会学会には次々と逸材が現れていた。そういう人々の学説理解を深めたいという思いが高田にはあった。それは『社会関係の研究』（1926）となって結

実している（1941, 27-28頁）。先述の「結合の上位」説の論文が収録されたのも、この著作である。

この日本の鄙びた田舎町の書斎から、テンニース、シェラー、シュムペーター、フィアカント、アモン、ヴィーゼ、ガイガーらといった、当時の名だたるドイツの学者たちとの手紙のやり取りがなされた。高田の論文はドイツの学会でも取り上げられた。さしもの高田にあっても、望外の幸せを感じていたであろうことが、自伝の筆致からもうかがえる。

> 〔・・・〕これらの代表学者のすべてによって私見の一角がかくまでに取り上げられ、また認められたことは私〔高田〕の全く意外とするところであった。三日月村の草深い村居にいて、当時の社会学の中心の先輩、同僚と同一の問題を考えるという意識は、病弱の私に測り知れぬ幸福を感じさせた。（「私の追憶　郷里三日月の生活（一）」）

高田はこれらの学者たちに、直接ドイツで会うことは叶わなかった。「私はとうとう外國にゆかなかつた。今後とも行く希望はない。それはいく機会がなかつたわけではない、たゞ、今になつて郷里の家を引き佛ひ得ない氣持が、とうとう外國に行かせなかつたと思っている」（1935, 15頁）。年老いた母親を一人残し、あるいは家郷から遠く離れて海外に行くことは、高田にはできなかったのである。

この1920年代半ばから30年代にかけての時期の次に高田が家郷に住む機会を得たのは、戦後のことである。それは、きわめて不本意な滞在であったといわなければならない。いわゆる「公職追放」の処遇である。

1946（昭和21）年11月末、京都大学の適格審査委員会は、高田を教員不適格と決定した。それは12月８日に公表された。ほどなく審査そのものを不当とする運動が起き高田を慰撫するが、ようやく審査自体の取り消しが確定するのが1951（昭和26）年６月。それまでの約５年の鬱々とした日々を、郷里で過ごすこととなった。

「追放のあらしに吹かれて木の葉の如くに九州に去った」（1957, 46頁）、という言葉が、当時の高田の心境を吐露している。京都から三日月町への移動は、京都駅を夕刻６時に発ち、翌朝９時に博多に着く準急があった。まんじりともできぬ夜の旅であったろう。博多から長崎線に乗り換え、最寄り駅の久保田駅で下車する。駅からは1.5キロほど歩き昼に到着する。1922（大正11）年まで母が住んでいた町であり、当時は、二人の姉も健在であった。「木の葉の如く」戻った日、その古巣を義理の姉が守ってくれていた。

> 追放の判定を受けてから数日郷里にかえるとき、やはり門司駅のホームに立ちて、今ふむのは九州の土、ここは理解と同情をもって私〔高田〕を見てくれる無数の人があると私語して、そのとたんに、熱い涙が頬を流れ下った。私にとっては三日月村の土をふみ、生家に入ることが心を清めてくれる。（「私の追憶　郷里三日月の生活（二）」）

屈従という言葉がふさわしい生活を強いられたが、他のどの時期にもまして、高田は健筆を振るった。やり場のない気持ちを、すべて執筆活動に打ち込んだかのようである。それはちょうど大学院の終わりに、心のわだかまりの全てを『社会学原理』（1919）という浩瀚な書物に注ぎ込んだことと似ていなくもない。不適格を決めた京都大学および京都とは、やはり高田にとっては風当たりの厳しい場所の記憶となった。

この家郷での暮らしは、半ば昼夜逆転していたとはいえ、規則正しいものであった。人の寝静まった夜半から午前中までの時間を研究にあてた。そのあと昼食をとり、夕方まで畑仕事をして、早めの床に就く。畑が８畝（約800平方）ほどで、家で食べるだけの野菜を育てていた（1957, 27-29頁）。「午前学究、午後農夫、夕方は父、夜は親せきや村人の相手をする隣人」（1957, 52頁）と高田は己を顧みている。審査そのものの取り消しが決まるのが、1951（昭和26）年、高田は大阪大学法経学部への職を得る。それから15年近くを京都で過ごし、日本の経済学の発展に寄与したのは周知のとおりである（早坂、1973）。

第６節　高田社会学の遺産

1972（昭和47）年２月２日、午後７時15分、しばらく療養をつづけていた高田は、老衰のため京都で永眠する。享年88歳であった。遺骨は京都から生家近くの墓所に移され、今も先祖代々の墓で眠っている[7]。

---

[7] 生前の願い通り、高田は夭逝した長男保美、次女さ江子とともに墓に入っている。

大正十三〔1924〕年東京から帰るときに三日月村永住をきめ、十四〔1925〕年は祖先の家をといて家を構えた。構えるにしても東京の地震にこりこりして、地下に狂気じみた地堅めをして丸太を打ち込み、砂利とセメントを流しこんだ。郷里の墓を守り郷里の土になる心構えであった。大正八〔1919〕年に京都を去って十年、その間に大病をすればいつも九大にいったのも、この心構えの結果である。いつか家の墓にいったとき、家から墓まで一町ばかりの距離、いずれ家から出て墓の土にかえる。この一町の道を先から先へ迂回するのが自分の今後の一生である。(「私の追憶　九大から京大へ（二）」)

迂回の道は、ようやく終着点にたどり着いた。今にして思うと、高田の家郷三日月町での生活は、地元の人々にとっても、裨益することが大きかったのではないだろうかと思われてならない。はじめに、で述べたように、小城市には高田保馬博士顕彰会があり、毎年２月初旬、市内の多くの学校の生徒が集い、文化発表会の行事を行っている。ここまで郷土に愛され続けている学者は、そう多くはないのではないだろうか。「夜は親せきや村人の相手をする隣人」、この言葉に偽りはないだろう。教職員不適格処分の取り消し後も、郷里のために奔走している。県内にあるたくさんの学校の校歌の作詞を数多く手がけ、講演をしてまわり、死後には高田文庫を三日月小学校に設け、小城市民図書館三日月館には多くの著作が陳列されている。小城市立歴史資料館には、遺族の方から寄贈された126点の遺品がある。その多くは自著と私信であるが、書画の他、父や兄の写真各１枚ずつ、それに高田家のアルバム数冊も含まれている。

老朽化した生家も、かろうじて保存されている。石碑や歌碑や胸像も、県内のいくつかの場所に点在している[8]。

なぜこれほどまでに高田は、郷土の人々に愛され続けているのであろうか。その理由の１つは、これまで見てきたような高田の家郷への愛着であったというほかない。

人生郷里をもつことは大きな精神的な安定を意味する。何かうれしい事があると郷里の人が喜んでくれると思い悲しい事があると郷里の人が同情してくれるという慰安を感じ、力及ばぬときには郷里の人にすまぬと思う。郷里は神につながるというのは誇張であろうか。(「私の追憶　郷里三日月の生活（二）」)

この愛情とも信仰ともとれる感情が、彼の結合の社会学を生み出したことは、すでに確認したとおりである。しかしそれだけではなかった。ふるさとに対する愛情は、様々な形で地元の人たちにも向けられている。

私〔高田〕がはじめて郷里をはなれたのは、高等学校入学のとき、明治三十五〔1902〕年九月である。それから五十五年あまりになる。その後も老母の生存中、すなわち大正十一〔1922〕年までは毎年三度位はかえっていた。広島にいった理由の一つは母に近くなること、かえりやすくなることであった。数週前に広島時代の同僚、勝部謙造〔1885-1964〕博士にあったとき、広島のときには毎日曜のようにかえっていましたなという昔話をしていられた。それゆえに郷里の親しみも加わり、また郷里の人々も私を身内のものとして扱われるようになったと思う。今までに校歌をつくった小中学校の数も県内に七、八校もあるであろう。(「私の追憶　東京から九州へ（四）」)

表２．高田が作成した佐賀県内の学校の校歌

佐賀県立有田工業高等学校	1925（大正14）年
佐賀県立佐賀農業高等学校	1925（大正14）年
富士町立北山小学校	1932（昭和７）年
三日月町立三日月小学校	1947（昭和22）年
佐賀県立佐賀西高等学校	1949（昭和24）年
武雄市立武雄小学校	1953（昭和28）年
小城町立小城中学校	1953（昭和28）年
三日月町立三日月中学校	1955（昭和30）年
小城町立三里小学校	1958（昭和33）年
佐賀県立佐賀北高等学校	1966（昭和41）年
若木中学校	不明

[8] 一例をあげると、佐賀西高校、小城駅、三日月小学校、川古大楠公園、小城市生涯学習センター、生家などに、高田の歌碑・記念碑が存在している。

顕彰会の発足当時のメンバーである秋丸喜代晴事務局長（元小城市副市長）は、三日月小学校講堂で開かれた高田の講演を見ている（写真、左は上野会長、中央は筆者、右は秋丸事務局長、2020年11月撮影）。身近に高田に触れ、あるいは講演を聞きに行き、あるいは高田の作った校歌を歌い育った郷土の人々が、今もなお高田を大切に守っているのである。

高田顕彰会の会員がまとめた仕事のうち、生誕の地を示す石碑、２冊の書籍、高田が作詞した校歌を収録したＤＶＤなどがある。狭い学問の世界では、学統を受け継ぐということがあろう[9]。しかし、高田顕彰会のような形での、草の根レベルの活動は、よりいっそうの温かみが感じられる。さながらこれは、郷土と郷土の人々を愛する者同士の励ましあいのようである。この高田と家郷、そしてそこで暮らす人々の三者の関係は、地域社会に住む人々の絆がさけばれている今日において範とすべき何ものかをふくんでいる。

むすび

高田にとって人と人の関係、すなわち社会関係の基盤にあるのは、利益や機能や目的のための結合（力の欲望）ではない。結合のための結合（群居の欲望）を基礎に置く、「ゲマインシャフト的」な関係であった。そうした高田の人間観、社会観は、生まれ育った農村がもたらしたものであった。農村を都市に変えることができるように、人間関係も洗練された「都市的」なもの、利益や機能を重視するものに変えることはできる。しかし農村が提供する人的、物的資源の支えがなければ、都市の生活は成り立たないように、人間関係も、その基礎となる部分に、互いに寄り添いあい、支えあって生きる「農村的」な部分を必要とする。草花の匂いのする高田の社会学が主張してやまないのは、究極のこの一点に集約できるだろう。

文献

アンダーソン、ベネディクト、1997、『想像の共同体－ナショナリズムの起源と流行』白石さや，白石隆訳、ＮＴＴ出版.

池田秀雄・平井三男、1929、『朝鮮読本』松山房.

臼井二尚、1973-1974、「高田保馬先生の生涯・人・学問」『ソシオロジ』第18巻第１号、第３号、第19巻第１号.

高田保馬、1913、『分業論』京都法学会（改版、1927、刀江書院）.

――――、1919、『社会学原理』岩波書店.

――――、1923、『階級考』聚英閣.

――――、1926、『社会関係の研究』岩波書店.

――――、1931、『ふるさと』日本評論社.

――――、1938、『回想記』改造社.

――――、1934、『貧者必勝』千倉書房.

――――、1940、『勢力論』日本評論社.

――――、1941、『思郷記』文芸春秋社.

――――、1943、『洛北集』甲鳥書林.

――――、1947a、『洛北雑記』大丸印刷.

――――、1947b、『社会歌雑記』甲文社.

――――、1949、「学問の旅－一学究の自叙伝」『経済』（経済社）第３巻第１号～４号.

――――、1957、『学問遍路』東洋経済新報社.

――――、1957-1958、「私の追憶」『週刊エコノミスト』（毎日新聞社）第35巻第41号～第36巻第13号.

――――、1961、『望郷吟』日本評論新社.

――――、1964、「定型としての共同社会」『ソシオロジ』第11巻第１－２号、1-10頁.

――――、1971、『社会学概論』岩波書店（初版、1922）.

高田保馬博士顕彰会、2004、『社会学・経済学の巨星、世の先覚者 高田保馬』非売品.

河村望、1992、『高田保馬の社会学』いなほ書房.

北島滋、2002、『高田保馬―理論と政策の無媒介的合一』東信堂.

ジンメル、Ｇ.、1999、『ジンメル・コレクション』筑摩書房.

谷多喜磨、1945、「思ひ出づるまゝに」、和田八千穂、『朝鮮の回顧』所収.

[9] 高田に関する記念論文集の類に、金子勇編著、2003、『高田保馬リカバリー』ミネルヴァ書房、青山秀夫他編、1964、『分配理論の研究―高田保馬先生喜寿祝賀記念』有斐閣、小松堅太郎編集代表、1954、『社会学の諸問題―高田先生古稀祝賀論文集』有斐閣、京都帝国大学経済学会編、1944、「高田博士還暦記念論文集」『経済論叢』有斐閣、第58巻第１－２号などがある。

テンニエス、F.、1957、『ゲマインシャフトとゲゼルシャフト―純粋社会学の基本概念（上・下）』岩波書店.
早坂忠、1973、「日本経済学史における高田保馬博士」『季刊　理論経済学』第24巻第２号、46-60頁.
吉野浩司、2004、「高田保馬の描く「全體社會」像－『民族論』から『世界社會論』へ」『一橋論叢』第131巻第２号、110-128頁.
牧野邦昭、2019、「高田保馬の農業論」『摂南経済研究』第９巻第１・２号、93-106頁.
マッキーバー、1957、『社会学講義』社会思想研究会出版部.
田中和男、2011、「高田保馬の青春」『社会科学』第92号、1-29頁.

表３．付録 高田保馬年譜

西 暦	和 暦	満年齢	履　歴	関連事項
1883年	明治16年	０歳	12月27日、佐賀県小城郡三日月村（現佐賀県小城市三日月町）遠江に、父清人（当時50歳）、母クス（当時43歳、旧名サホ）の末子として生まれる。兄に清俊、姉にフジ、モキ、チヨがいる。	
1884年	明治17年	１歳		下村湖人生誕 日清戦争
1885年	明治18年	２歳		田澤義鋪生誕 下関条約
1889年	明治22年	６歳	４月　三日月村晩成小学校（現三日月小学校）に入学する。	大日本帝国憲法
1897年	明治30年	14歳	三日月村晩成小学校を卒業する。 旧制佐賀中学校（現佐賀西高校）に入学する。同期生に吉田善吾、武富俊彦らがいる。	
1898年	明治31年	15歳	父清人、死去する。	
1899年	明治32年	16歳	中学３年時に少年雑誌『文庫』（少年園）掲載の浮浪者や軽業師の話を読み、社会の弱者について考えさせられる。	
1900年	明治33年	17歳	中学４年の春、進路の相談のために四日市の兄を訪ねる。	雑誌『明星』創刊
1901年	明治34年	18歳	中学５年の春、ふたたび兄のいる四日市に進路の相談に行く。 囚人についての詩、救貧についての論文を校友会雑誌『栄城』（佐賀中学校栄城会）に掲載する。	
1902年	明治35年	19歳	３月　佐賀中学校を卒業する。 ４月　友と天山に登り、医科に行くのは嫌だと友に告げた。 ９月　熊本第五高等学校　第三部（医科）に入学する。	日英同盟
1903年	明治36年	20歳	３月　医学に興味を失い転科を試みるが、不可能であったため、３学期のはじめに退学する。 母と兄は退学を許してくれたが、浪人中の勉強は苦痛であった。 このころ幸徳秋水『社会主義神髄』を読んで、大きな影響を受ける。 ９月　五高第一部に入学。同期生に瀧正雄、下村寅太郎（湖人）らがいる。 10月　五高の校友会機関紙『龍南会雑誌』に「社会主義と詩人」を発表する。	

西 暦	和 暦	満年齢	履　歴	関連事項
1904年	明治37年	21歳	４月　『龍南会雑誌』の編集に参加。同誌に「東欧の大聖を懐ふ」「わが牢獄観」を発表する。	日露戦争
1905年	明治38年	22歳	９月、特待生となる。 『龍南会雑誌』に「感情の侮辱」を発表する。 この頃、奥太一郎の英語の授業で、ミル『経済学原理』、スペンサー『社会学』を読む。 12月　病気により休学し、鹿児島で転地療養する。	ポーツマス条約
1906年	明治39年	23歳	４月　帰郷し療養生活を続ける。 ９月　復学する。 秋　熊本市草葉町の教会で洗礼を受ける。 栗野事件に際会し、校友と決起する。	
1907年	明治40年	24歳	７月　第五高等学校第一部文科を卒業する。 大学入学をひかえウォルムスやタルドの社会学を読む。 夏　１か月ほど親友である瀧正雄と唐津の虹ノ松原に滞在する。 ９月　京都帝国大学文科大学哲学科　入学。 学科30名の入学者のうち、ただ１人社会学を専攻する。 百万遍（知恩院）表門の東隣の佐竹氏宅に下宿する。 毎週米田庄太郎の私邸にてギディングス『社会学原理』を読む。その後10年にわたり弟子一人という状態がつづく。 この年の米田の社会学講義は、ギリシャ思想からコントまで。 秋　米田にワルラスの理論経済学に関する本を見せてもらう。	
1908年	明治41年	25歳	７月　米田よりタルド『社会法則』の講読を受ける。 この年の米田の社会学講義はコントからジンメル、タルド、デユルケームまで。これが米田の社会学概論にあたる。 社会運動に燃える気持ちを「社会理想学」という原稿に書き付けるも筐底に秘す。 報告書「結社性（ソシアリティ）に関する学説の発達を論ず」を提出。	
1909年	明治42年	26歳	報告書「ギディングス社会学の発達」を提出。 夏以降　卒業論文の執筆に専念する。	伊藤博文暗殺
1910年	明治43年	27歳	７月　京都帝国大学文科大学哲学科　卒業。 美濃紙に毛筆で800枚の卒業論文「分業論」を書き上げる。特殊な現実の問題に取り組めという米田に応じた、基礎的普遍的な問題を扱いたい高田の妥協の作であった。 ９月　大学院に入学。米田庄太郎のもとで社会学を専攻する。 特選給費生の選に漏れる。 このころより京都と京都大学への愛着を感じなくなる。 秋　大堰町の下宿の相部屋となった安井定四郎の紹介で新詩社に加わる。	大逆事件 日韓併合条約

西 暦	和 暦	満年齢	履　歴	関連事項
1911年	明治44年	28歳	雑誌『芸文』に「文明の迷妄」を発表し、貧乏論に手を染める。 卒業を亡き父に報告するために、兄が12年ぶりに佐賀に帰郷し、父の石碑を立てる。 兄の家の留守番をするため四日市に約１か月滞在する。この時、グロッパリの翻訳を終える。 研究報告「社会結合論」を提出。 秋　経済学読書会が友人の瀧正雄を世話役として発足。高田もこれに参加する。 このころ、同郷の先輩松田正久をたより、政界に身を投じようとしたが、瀧正雄に諌められ断念する。 千葉胤成の紹介で、臨済宗大学（現花園大学）で社会学を講義する。	
1912年	明治45年 大正元年	29歳	春　田中大溝町（現大堰町）の稲葉氏宅に寄寓。 ７月　研究報告「社会階級論」を提出。 ８月　戸田海市の慫慂により『分業論』の改稿を試みる。戸田はこの原稿を細かく添削する。 12月　マルクス主義に関する最初の論文「資本蓄積論」の研究、執筆をすすめる。 この年から、小川郷太郎博士の指導のもとに、カーネギー平和財団の研究助成金により、「日本徴兵制度の経済的影響」に関する研究に従事する。	大正改元
1913年	大正２年	30歳	７月　師団所在都市の調査のために、九州、四国、北海道にでかける。 12月　『分業論』京都法学会（法律学経済学研究叢書）。 グロッパリ『社会学綱要』有斐閣（経済学資料）。 関西大学で経済書講読を担当する。	
1914年	大正３年	31歳	春　下鴨東林（現泉川町）瀧正雄宅に寄寓。 ９月　京都帝国大学法科大学講師として、フランス語講読を担当し、シャルル・ジイド『経済原論』を読む。 秋　糺森、双葉庵に転居。 京都法政大学（現立命館大学）で統計学を講義する。数学者園正造と親しくなる。	第一次世界大戦勃発
1915年	大正４年	32歳	2月26日　佐賀県神埼町の神埼実業銀行頭取大石太郎の三女キヌと結婚する。 下鴨蓼倉に新居をかまえる。 秋　窃盗に遭い妻の衣類を盗まれる。 『大数法論』京都法学会（法律学経済学研究叢書）。	大戦景気
1916年	大正５年	33歳	秋　下鴨警察署前に転居する。 この年より『社会学原理』の執筆に没頭する。 またパレート『政治経済学マニュアル』付録の数学の読解に取り掛かるも難渋する。 同志社大学で社会学を講義する。	
1917年	大正６年	34歳	11月　下鴨松ノ木町にあった三角屋敷に転居するも、数日後、赤痢を病み、府立病院に約３週間入院する。この病が、後々まで続く胃病の発端となる。	ロシア革命

西 暦	和 暦	満年齢	履　歴	関連事項
1918年	大正７年	35歳	年始に退院するも、兄を委縮腎で失う、享年59歳。嫂も患い、その見舞いに行く途中、駅で関節を痛める。また妻も膀胱炎にかかる。 ３月　養生のため城崎温泉に行く。 このころ岩波茂雄が自宅に訪れ、哲学叢書の一冊として「社会学」を書いてくれと求められるが、大冊となる『社会学原理』の出版を高田が提案し受け入れられる。 田中村大溝（現大堰町）に移る。 『社会学的研究』東京寳文館。	シベリア出兵 米騒動
1919年	大正８年	36歳	新春　スペイン風邪にかかり、それが妻にもうつる。 ２月　『社会学原理』岩波書店。 早春　内藤湖南より朝日新聞社への入社を求められるも、学問の志を捨てられず辞去する。 ３月　塚原政次より広島高等師範学校（現広島大学）の社会学教授への熱心な勧めを受け、６月に赴任することを決める。 秋　広島高等師範学校での講義案を毎回書き継ぐ。これが後にまとめられる『社会学概論』の草稿となる。 下村茨（ひかる）主宰の歌会「ほむら」に参加する。当時は島木赤彦の『氷雨』を愛読する。	三・一独立運動 パリ講和会議
1920年	大正９年	37歳	10月、長女秋子生まれる。 秋、胃を病む。 『現代社会の諸研究』岩波書店。	国際連盟発足 森戸事件
1921年	大正10年	38歳	２月　胃病のため約１カ月入院する。 入院中に長姉を亡くす。 ６月　東京商科大学（現一橋大学）教授に就任する。社会学と経済学史を担当する。 秋　西大久保で単身赴任の生活を始める。 12月　文学博士号を取得する。	
1922年	大正11年	39歳	剰余価値について、河上肇博士の所説を批判する。同博士およびその他のマルクス主義者と10年間にわたる論争を展開する。 鹿児島県教育会の招きで霧島温泉を訪れる。 11月　母クス死去する。 『社会学概論』岩波書店。 『社会と国家』岩波書店。	全国水平社結成
1923年	大正12年	40歳	春　中野に転居。後に家族も上京する。 ７月、満州鉄道が主催する講演旅行のため約２週間、大連、奉天に滞在する。 胃病が悪化し、慢性胃潰瘍となり、11月より病床に伏す。 平井文雄博士に来診を乞う。 『階級考』聚英閣。	関東大震災
1924年	大正13年	41歳	２月　東京商科大学を辞任。帰郷し、静養生活を送る。 ４月　長男保美出生。生後25日にして夭逝する。 初夏　妻長女と大分の湯平温泉で胃病を養う。 11月ごろから家の建て替えをはじめる。工事が完了するまで半年を要する。 その間に湯平温泉で湯治する。また隣村の甥の家に厄介になる。 『経済学研究』岩波書店。	

西 暦	和 暦	満年齢	履　歴	関連事項
1925年	大正14年	42歳	５月　九州帝国大学法文学部教授に就任する。自宅より汽車で通勤する。 ７月　雲仙新湯ホテルに逗留後、船で熊本にわたり教育会の講師として講演を行う。宇和島に移るも滞在中の食事がたたり胃疾患が再発。昨年に引き続き大分湯平温泉で湯治する。 シェラー『倫理的形式主義と実質的価値倫理』を携える。 10月　次女さ江子生まれる。 「ひのくに」主宰の中島哀浪に師事する。 『階級及第三史観』改造社。	普通選挙法
1926年	大正15年 昭和元年	43歳	４月　経済学原論の講義を再開する。 10月　胃を損ね半年休講する。 改元の前後より社会学から経済学へ研究の重点を動かす。特に価格論が主な関心分野であった。 『社会関係の研究』岩波書店。	12月26日、昭和改元
1927年	昭和２年	44歳	４月より経済学原論の講義を続行する。 『人口と貧乏』日本評論社。	金融恐慌
1928年	昭和３年	45歳	三女ちづ子生まれる。 ６月　宮崎を訪れた土産に買った、おちちあめに、子どもら大喜びする。 『景気変動論』日本評論社（現代経済学全集）。 『経済学』日本評論社（社会科学叢書）。	張作霖爆殺事件
1929年	昭和４年	46歳	４月　京都行きを前に、佐賀で家族写真を撮る。 ５月　京都帝国大学教授兼任となる。経済原論講座を担当する。 ７月23日　次女さ江子を失う。 10月　この年より、一年の半分は帰郷し、九州大学での講義を受け持つ。 『価格と独占』千倉書房。 『社会雑記』日本評論社。 全五巻『経済学新講』岩波書店の刊行はじまる（～1932）。	
1930年	昭和５年	47歳	11月　京都帝国大学専任教授。九州帝国大学教授を兼任。	昭和恐慌
1931年	昭和６年	48歳	翌年にまでおよぶマルクス主義批判の講演旅行。本年は岡山市と米子市の高等学校で講演を行う。 『ふるさと』日本評論社。 『マルクス経済学新批判』社会教育会（思想問題研究会編）。 『労働価値説の吟味』日本評論社（理論経済学叢書）。	管理通貨制度 満州事変 シュムペーター来日
1932年	昭和７年	49歳	５月頃　今宮泉堂町の武富精氏邸の２階の一室に住む。 文部省関連の講演会で仙台を訪れる。 11月　松岡忠一校長の招きで、宮崎高等農林学校にて農村問題を講じる。 島根県農会で同趣旨の講演を行う。	五・一五事件
1933年	昭和８年	50歳	日本学術振興会常置委員となる。２年にして辞める。 『経済原論』日本評論社（理論経済学叢書）。 本書をもって経済学を切り上げようと思うが、利子論の理解が不十分であることから、もう少し経済学に沈潜する。	国際連盟脱退 滝川事件

西 暦	和 暦	満年齢	履　歴	関連事項
1934年	昭和９年	51歳	12月　九州帝国大学の兼任教授を退任する。 『国家と階級』岩波書店。 『貧者必勝』千倉書房。 『マルクス経済学論評』改造社。	
1935年	昭和10年	52歳	この頃より利子論にのめり込む。 『民族の問題』日本評論社。 『利子論研究』岩波書店。	天皇機関説問題
1936年	昭和11年	53歳	家族が郷里より上洛。塔之段に居住。終の棲家となる。 ７月　胃疾のため京都帝国大学付属病院に入院する。 ８月　退院する。 10月　三朝温泉で湯治する。 『経済と勢力』日本評論社（理論経済学叢書）。	二・二六事件
1937年	昭和12年	54歳	龍谷大学で社会学を講義する。 年末　大同学院での講義のため新京に赴く。 『利子論』岩波書店。	盧溝橋事件
1938年	昭和13年	55歳	２月　京都帝国大学経済学部長に就任する。 ７月　高等文官試験の経済学を担当する。 『回想記』改造社。 『経済学概論』日本評論社（理論経済学叢書）。	国家総動員法
1939年	昭和14年	56歳	２月　経済学部長を退任する。 ６月　東京帝国大学仏教青年会の招きで「帝国主義論」の講演をする。 ９月　東京帝国大学経済学部で勢力説の概要を講演する。 『東亜民族論』岩波書店。	ノモンハン事件 第二次世界大戦勃発
1940年	昭和15年	57歳	１月　日本学術振興会常任委員となる。 12月　胃疾のため京都帝国大学付属病院に１カ月入院する。 『新利子論研究』岩波書店。 『民族と経済』有斐閣。 『勢力論』日本評論社。	日独伊三国同盟 大政翼賛会結成
1941年	昭和16年	58歳	『思郷記』文芸春秋社。 『勢力説論集』日本評論社（理論経済学叢書）。	12月７日　真珠湾攻撃
1942年	昭和17年	59歳	『民族論』岩波書店。	ミッドウェー海戦
1943年	昭和18年	60歳	１月　民族研究所が設立され、所長を兼任する。 ２月上旬　東北帝国大学法文学部で民族論を講義する。 『民族耐乏』甲鳥書林。 『洛北集』甲鳥書林。	大東亜共同宣言
1944年	昭和19年	61歳	３月　京都帝国大学を退職。 ９月末まで　同経済学部講師の嘱託勤務。 民族研究所長の専任となる。 『高田博士還暦記念論文集』刊行。 『統制経済論』日本評論社。	Ｂ29爆撃機による本土空襲
1945年	昭和20年	62歳	10月　敗戦により民族研究所は廃止・廃官となる。 12月18日　恩師米田庄太郎逝去。	原爆投下 ポツダム宣言受諾

西 暦	和 暦	満年齢	履　歴	関連事項
1946年	昭和21年	63歳	３月　京都帝国大学名誉教授。 12月　京都大学経済学部の教員適格審査委員会によって、教員不適格の判定を受ける。 公職と教壇から離れて、郷里での晴耕雨読の研究生活に入る。 『価格・労銀・失業』東洋経済新報社（東洋経済講座叢書）。 『終戦三論』有恒社。	天皇人間宣言 ケインズ没
1947年	昭和22年	64歳	６月　中央教職員適格審査委員会より教職不適格者指定。 『インフレエションの解明』関書院。 『経済の勢力理論』実業之日本社。 『社会歌雑記』甲文社。 『社会学の根本問題』関書院。 『世界社会論』中外出版（世界経済学講座）。 『洛北雑記』(大丸印刷)。	日本国憲法施行
1948年	昭和23年	65歳	『経済学原理』日本評論社。 『経済学論』有斐閣。 『最近利子論研究』有斐閣。 『社会主義経済学入門』広文社（入門経済学叢書）。	
1949年	昭和24年	66歳	一万田尚登総裁の日本銀行の後援で、貯蓄について講演旅行を行う。 『経済学方法論』小石川書房。 『略説経済学』関書院（経済学選書）。 『労働価値説の分析』甲文社（社会主義経済学研究）。	ドッジ=ライン
1950年	昭和25年	67歳	『社会科学通論』有斐閣。 『社会学大意』日本評論社。 『耐乏夜話』実業之日本社。 『マルクス批判』弘文堂（アテネ新書）。 『日本民族の復興と経済の自立』改造社(一万田尚登との共著)。	朝鮮戦争 シュムペーター没
1951年	昭和26年	68歳	６月　教職不適格の判定が、原審破棄で取り消される。 ８月　大阪大学法経学部教授となる。 『社会学』有斐閣（社会科学叢書）。 全３巻『経済学入門』有斐閣（社会科学叢書）の刊行が始まる（～1959)。	サンフランシスコ平和条約 日米安全保障条約
1952年	昭和27年	69歳	『経済自立論』東洋経済新報社。	日本主権を回復
1953年	昭和28年	70歳	６月　大阪大学法経学部、学部長に就任する。 ８月　大阪大学経済学部　学部長に就任する。	
1954年	昭和29年	71歳	３月　大阪大学経済学部附属、社会経済研究室（現大阪大学社会経済研究所）初代室長兼教授に就任する。 『経済学概説』有斐閣。 小松堅太郎等編『社会学の諸問題高田先生古稀祝賀論文集』有斐閣。 大阪大学経済学部社会経済研究室編全３巻の『経済成長の研究』有斐閣の刊行が始まる(～1957)。 全３巻『経済学講義（上・中・下)』有斐閣の刊行が始まる（～1955)。	

西 暦	和 暦	満年齢	履　歴	関連事項
1955年	昭和30年	72歳	７月　大阪大学を退職する。 ８月　大阪府立大学経済学部の教授に就任する。 11月　大阪大学名誉教授となる。 『ケインズ論難―勢力説の立場から』有斐閣。 『貧しき日本経済』日本評論新社。	神武景気
1956年	昭和31年	73歳	『社会主義評論』自由アジア社。 『消費函数の研究』有斐閣。	国際連合加盟
1957年	昭和32年	74歳	10月　大阪府立大学経済学部長に就任する。 『学問遍路』東洋経済新報社。	
1959年	昭和34年	76歳	４月より約１年間、大阪大学付属社会経済研究室にて、「賃金問題研究会」を開く。 10月　大阪府立大学経済学部長を退任。 『社会主義経済学』千倉書房。 『勢力論』有斐閣。	
1960年	昭和35年	77歳		国民所得倍増計画
1961年	昭和36年	78歳	『望郷吟』日本評論新社。	
1963年	昭和38年	80歳	１月　宮中御歌会の召人の栄に浴す。 ３月　大阪府立大学経済学部教授を退職する。 ４月　同大学名誉教授。 同月　龍谷大学経済学部教授となる。	
1964年	昭和39年	81歳	11月３日　旭日重光章を授与され、社会学の理論的体系確立の貢献者として文化功労者として顕彰される。 青山秀夫等編『分配理論の研究高田保馬先生喜寿祝賀記念』有斐閣。	東京オリンピック
1965年	昭和40年	82歳	４月　龍谷大学経済学部教授を退職する。	日韓基本条約
1971年	昭和46年	88歳	12月　北野熊喜男ら数名が病床に集い、88歳の米寿を祝う。	
1972年	昭和47年		２月２日午後７時15分　老衰のため永眠する。享年88歳。 正三位勲一等に叙せられ瑞宝章を授与される。	
1974年	昭和49年		３月２日　佐賀県小城郡三日月町字遠江の高田家墓地に納骨される。	